

妙たえの光ひかり

通刊33号 復刊8号
1993年3月8日(季刊)
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜
〒953 ☎0256-77-2025

紅梅

妙光寺に春を一番に告げてくれるのがこの梅の花。例年三月十日頃が盛りだが、今年は暖冬で早まりそう。白梅は二月中に開花するが、紅梅の方はやや遅い。

これまで境内の中央、三重塔の手前にあったが、本堂前の松を引き立たせる目的で、昨年春現在の入口水路脇に、十本全てを移植した。ずっと昔から妙光寺にある木で相当な古木、それだけに愛着を持って眺める人が多い。木の内部が腐ったり、キツツキに食われたりしてすっかり空洞になり、皮だけで生きている姿には驚かされる。

春を告げると言えばやはり梅にウグイス。姿を見ることはまだだが、この頃からへたな声で鳴き始め、その頃から風も日差しもやわらかくなって春を実感する。鳴き方がうまくなるのは四月中頃になるが、山が近いせい七月末まで聞くことができる。この季節、団体参拝の方にお話するとき、鳥までホーホケキョウ(法華経)と唱えますよと言って、山寺の自然を感じてもらっている。

ある夫婦

小川英爾

長岡市に住む西山啓作さん(86)は明治四十年生れ。西山家の長男として元気に生れたが、三才のとき病気による高熱がもとで、一夜にして耳が全く聴こえなくなってしまう。以来八十三年間、音のない世界に生きてきたが、その人生は静寂そのものではなかった。

幼い時に聴力を失うということは言葉を失うということであり、知能の発育にも影響を与えることがある。事実啓作さんが発する言葉はオトト(お父さん)、オカカ(お母さん)、ジャドウ(砂糖)など、幼い頃に覚えたものだけで、家族の名前を呼ぶことはない。しかし独力で指先を使って文字を覚え、七才下の弟に教えた程で、読み書きに不自由はない。当時その指先はすり減ってつるつるになっていたという。先を案じた両親は開設間もない聾(ろう)学校に入学させ、竹細工を学ばせた。その後手先が器用で頭の回転も早い啓作さんは、機械いじりに興味を持ち、昭和初期の頃、自分でコイルを回いてモーターを作ったり、農作業用の機械を考案したりした。ある年、大水で村中の田んぼが水没、借りてきた排水機が動かさず皆が困っているとき、ジェスチャーで操作のましがいを指摘したこともあったという。

二十才近くになり、耳と口の不自由な啓作さんに相続をさせることに不安を感じた両親は、弟に譲ることを持ちかけた。啓作さんは「俺がここの長男だ、家は俺が守る」と猛反発、大暴れした。なれば嫁をと、すぐ前で親戚筋に当たる安井家の二才年上のミネさんに話が持ち込まれた。しかし安井家は大反対、ミネさんも逃げ回わる。困った啓作さんの父親が遠縁に当たる妙光寺の先々代住職に相談、「家のためには親戚が仲良くしなければ」との説得に、ミネさんは泣く泣く承服する。その時のミネさんの気持ちは「私が犠牲になって話がおさまるのなら」だったという。その直後西山家が火災に遭う。「どうせ苦勞するなら」とミネさんはすぐに嫁ぎ、二人の新居は焼け残った土蔵

の中、おちついて結婚式を挙げたときには長男が十一才を迎えていた。

美人でシャキシャキの性格のミネさんに姑の風当りは強く、「こんな件のところは嫁に来るのは財産目当てだらう」と冷たくされる毎日、さんざん泣いて苦勞した。あまりのつらさに死のうと決めて、田んぼ道を歩いていたら、家の方からニワトリが不思議にバタバタ大騒ぎするので、どうしたらいいのかと戻ってきてしまったことがあったという。

そんなミネさんに対して、啓作さんは自分を表せないイライラからなぐることがしばしばだった。ミネさんは世間に受け入れられない夫が気の毒と耐えてきた。家業である農作業に二人は精を出し、三人の子供にも恵まれた。あるとき山を売る話が持ち上がったが、啓作さんが猛反対、大暴れして結局立木だけ売った。その後啓作さんが一人黙々と植林と手入れを続け、解放にも合わず、その土地が現在大きな資産として家計を助けているという。

苦勞続きのミネさんにとって、心の救いは信仰であった。朝夕のお勤めはもちろん、菩提寺の妙音寺の行事には何をおいても欠かすことはなかった。ただ機械いじりと山登りが好きな啓作さんが、仏壇に手を合わせようとしたのが悩みだった。晩年の啓作さんは毎日隅から隅まで新聞を読むのが日課、また海外旅行にも二度出かけた。ミネさんは啓作さんを心使いながら、畑仕事と信仰に余念がない。

平成元年九月十二日、ミネさんが啓作さんを気使いながら、ガンで先立った。八十一才だった。以来啓作さんは仏前に必ず手を合せる毎日、その顔には寂しげな表情がありありと浮かんでいた。そして今年一月、ミネさんの命日である十二日に風邪がもとで寝込み、祖母の月命日に当る二十六日、老衰で八十六年の生涯を閉じた。通夜の席上、弟の芳雄さんが、「兄は不信心だったとよく言われてきた。でもこの西山家が火事するとき、あの重い仏壇をまっ先に冷靜になって分解、一人で無傷で運び出したのは兄貴だった」と、啓作さんの沈黙の世界の一端を語られた。先立たれたミネさんが、妙光寺の先代住職の実姉に当る。

手足が不自由な中で の頑張り婆ちゃん

岡崎 タツ さん(78)

巻町福井の岡崎タツさんは、幼い頃の病気で手足が不自由なのに明るく働き者、寺参りを欠かさない信仰熱心で、ゼンゼン(善左衛門の)婆ちゃんと呼ばれ親しまれている。

「昔のことを思い出すだけでも涙が出る程大変だった」と語る顔も笑っている。岡崎家の一人娘として生れるが、生後三十日目に引きつけがもとで、以後両手両足が縮んだようになって正常に動かすことができず、歩くのも四才になってから。当時の医療ではどうにもならなかったという。尋常小学校でも体操の時間はいつも見学。

二十才になって祖父の実家から婿を迎えたが、三人目の男の子が腹にいるとき、一家を置いて一人満州に渡り以来音信不通。病弱な母親が三人の子をみて、タツさんが不自由な体で田畑に

出るが、その母親も間もなく死去。大工の父親は畑仕事を一切せず、タツさん一人が子育て、家事、田畑の仕事を全てこなした。「戦争中で夫のいない家も多く、それは平気だったが、両手足が不自由で百姓仕事が一番つらかった。困ったとき祖父の実家に助けられた恩が今も忘れられない」と。村の人も「我々がまだ寝ているのに、足の悪い独得の足音が朝一番に聞こえてきたもんだ」と語る。

そんなタツさんにとって一番の楽しみがお寺参りだった。お彼岸、お盆、お会式と年四〜五回の祭祀に、二十五才の頃から近所の婆ちゃん達と以前は三里の道を歩いて、後にはバスを乗り継いで欠かさずお参りした。十一月にお会式をした頃、日が短く雨でも降ろうものなら帰り道の途中で暗くなり、

提燈を借りて帰ってきたことも。

「若い頃は金も暇もなくてそれどころじゃなかったが、今のご前様になって身延山に七面山、本門寺のお会式にも連れていってもらった。人に迷惑をかけられないと一生懸命登ったが、俺より具合の悪い人もいて驚いた。あときのうれしさは忘れられない」と。

三年前に転んで骨にヒビが入って以来、外出をひかえ、五十年続けたお講への参加も母ちゃんに代ってもらった。三番目の息子さんは十七才のとき弥彦事件で死亡。今は次男夫婦と孫夫婦に曾孫と暮らす。「俺もつらかったけど子供達も山仕事の手伝いばかりで大変だったんだ」と昔を思い出すタツさん。



総代・世話人会議が開かれました。

総代・世話人会議を二月二十一日に開き、壇家の護持会費と安穩廟の安穩会費の今年度決算、来年度予算を協議しました。通常は年度末の三月ですが、当日安穩廟二基目の地鎮祭を奉行するのに合わせて、早目に開いたものです。

妙光寺の運営は県に届けている宗教法人妙光寺々院規則によって、この会議が就職選定の同意から、年間予算まで全て決定します。世話人は地区ごとに壇家の中から一〜三名が推薦で決められ、その中から五選で三名の総代が選出され、就職が指名します。このたびこれまで欠員だった内野地区からも加わり、総勢で二十名の陣容です。

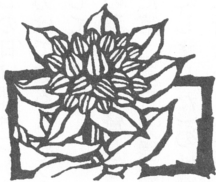
この方達は全くの奉仕で、年一〜二回の会議出席、担当地区での印刷物配

布、護持会費徴集、施餓鬼法要の塔婆受付、行事参加の出欠取り、秋米集め、はてはお盆棚経のお上人の道案内まで。さらには修復等の事業があれば寄附のお願いに歩き、借入金が必要があればその保証人にまでなります。また大きな行事があれば、まっ先に役が割り振られ、地区にも応援を求めます。目に見えない苦勞も多く、他のお寺では引き受け手がなくて高齢の方が多いものです。ありがたいことに妙光寺では割りには若い方が多く、それだけに大変な役目だということがわかっていただけたかと思えます。

今回の会議では例年の決算、予算の他に、第二基安穩廟の工事計画、これまでの収支報告、そして安穩廟の全収

益を基金として運用する旨のこれまでの決定を文章化した、「安穩基金管理運用規則」の承認、等を協議しました。これらをご承知のように毎年七月、全壇家に報告されます。

いつもは会議終了後、乾物にビール程度で散会しますが、今回は午前九時からの会議後、十一時半から安穩廟の地鎮祭に参列していただきました。寒風吹きつける中、工事の順調な進行を祈願、その後直会いとして、設計者の野沢先生、施行業者を混じえ、会費制でささやかな懇親会を開きました。ここでは、これまでの順調な進行を喜び、そしてこれからの妙光寺の運営が語られました。



基金管理運用規則ができました。

安穩廟の管理、供養は基金の運用益で行なうという方針で来ましたが、その基金が現在四千万円になっています。そこでこれを『妙光寺安穩基金管理運用規則』として明文化、二月二十一日の壇家役員会で承認し決議しました。

会員全員に別紙同封しましたが、ここでは運用益を、安穩廟の管理・供養・文化的事業、妙光寺運営の助成、を三本の柱として使用すると決めました。超低金利の現在は管理供養で手いっぱいですが、将来は高齢者ケアの問題や国際援助など、生きた仏教を目指して対社会的な活動ができればと夢見ています。

現在数人の方から、もしもの場合遺産の一部を寄附したいとのありがたいお申し出があり、この場合ご本人と相談の上、この基金を受け皿にさせていただきます。これらのご検討も考えています。

ためにも当面は妙光寺役員会が管理運用を担当しますが、早いうちに安穩廟の方々にも加わっていただいで、管理運用委員会を作りたいと思います。より多くの方々のお力をお借りしたいと願っています。

第四回フェスティバル安穩を前号で八月二十八、九日と書きました。しかし町の行事とぶつかりそうで、一週間早い二十一、二日に変更の必要が出てきました。その日程を決めたり、準備や当日のお手伝いをお願いしたく、相談の会を持ちます。またそこで基金運用の件もご意見をお聞きしたく思います。三月十九日夕方五時から夕食を取りながら、ご希望の方は泊まりたいだいで翌日のお彼岸法要にもご参加下さい。この場合一泊三食一万円。ご都合のつく時間帯のみのご参加も歓迎。参加申し込み、その他詳しくは早目に

お電話下さい。この日は都合つかないが何んらかの協力はできるという方、お手紙をお待ちしています。

昨年末より木の移植、土盛り等の準備をしてきました第二基目安穩廟（二の廟と呼ぶことにしました）の地鎮祭を二月二十一日に行ないました。壇家役員、施工業者、それに広島造園工事現場からかけつけた設計の野沢先生が列席、寒さに震えながら工事の安全と順調な進行を祈念しました。七月末までに第一期工事として内側三十八区画を完成させる予定です。



世の中いろいろ



以前部屋の壁にアメリカ製の世界地図を貼っていた頃があった。住職がアメリカに住む友人に頼んで送ってもらった物。始めは日本製の地図を見慣れていたのに変に感じた。地図の真ん中には南北アメリカがドーンと鎮座しており、日本はというと右の端にちょこんと張り付いている。それまで世界地図は万国共通日本と太平洋が中心に展開されていると本当に信じていた。

でもこの(いいとし)になってからの発見で少し人生観が変わったといっている。おおげさだと思われるでしょう。でもなんだか胸がどきどき、楽しい発見だった。

我が家に立ち寄った友人が「やまごぼう」のみそ漬けを持ってきてくれた。

かりかりと細いそれは御飯のおかずにも最高だが、ふっと原材料の欄を見ると「あざみの根」と書いてある。私はあざみをやまごぼうと名付けるとは、と少し腹が立ちかけた。その時友人は「ほほー。あざみの根もなかなかうまいもんだな。」と平然と言ったのけた。そういう物のとらえ方や感じ方があることに、はっとした。

私は核家族で育った。住んでいた場所も転勤などで人の出入りの多い所だった。だから比較的自由だった。人がどう思おうと自分なりの生活スタイルが作り易い。今の私の推測でしかないが、両親は其中で自由に私たちを育てたのだろう。私にとっては頼りになる大人は両親だけだった。同居の祖

父母もいなければ、ご近所のうるさいお爺さんも記憶にない。だから私の価値観はほぼ両親に似ていた。それが結婚して義母と同居、子供を生み、この村で、お寺でたくさんの人々に出会った。それまでの私の価値観はガタガタと崩れ去った。混乱した私を元気にしてくれたのは、先に書いたエピソードの数々である。

義母はよく「みんながこういっている」という言葉を使った。今ならその中の義母の気持ちが変わらないでもないが、みんなが……というのは説得力に欠ける。「私は」というのがいい。「人は人自分は自分」が基本。でも自分が絶対じゃない。自分の知らない発見や出会いが大好き。まだまだ私の混乱は続くのだろうが、(人生いろいろ男もいろいろ)と大声で歌ってみる。女だって色々なんだから、ねえ。

(小川 なぎさ)

行事案内

三月二十日(土)

春のお彼岸中日法要

10時半 安穩廟法要

11時 春季彼岸会法要

12時 おとき

1時 説教(山主)

ここ数年お参りの方が多く、おときが足りなくなることもある程です。時間の都合でお墓参りだけでお帰りの方も、本堂へのお参りを忘れなく。

お墓参りの際、お供え物のビニール、アルミ缶、ガラスコップ等は必ずお下げてお持ち帰り下さい。放置されますと風で飛んで処理に困ります。

四月二十七、八日(火、水)

ご妙判ご開帳大会(ご判様)

27日午後4時説教開始、同8時速夜

稚児音楽大法要、同9時山主説教、同

10時施餓鬼法要、0時通夜説教(28日朝まで)

28日午前10時御妙判奉迎法要、12時御妙判御開帳

法要出仕の稚児に女兒六名を募集しています。小学校入学前位の年令が適当、壇家に限りませんのでご希望の方早目にご連絡下さい。今年の年番は山本組です。平日の上農作業の忙しい時期で恐縮ですが、よろしくお願いいたします。

三重県の近藤さんと佐藤さん、巻の小林与志英さんの三人ご協力で、祖师堂御宝前の木蓮華の金箔塗替え修理を奉納下さいました。同じ佐藤さんには客殿入口参道の石枠、植栽等の整備にも奉納いただきました。いづれもご判様までに完成予定ですのでお楽しみに。



あとがき

昨年話になりますが大晦日の除夜の鐘に大勢の方が集って下さいました。近所の他宗のお寺でも新しい鐘で戦後初めての除夜の鐘を撞くことになって、これまで妙光寺に来てくれた人かなりの数がそちらの壇家。今年人数がぐっと減ると予想していたのですが、逆に前年の五割増し。景品もアツという間になくなり大慌て。

後で聞いたら、あちらの壇家の人は除夜の鐘のハンゴをしたという人が多く、初めて来たというこちらの壇家の人は口々に「妙の光に書いてあったから」と嬉しい答え。ここまで読んでいただいていると思うとかえって緊張してしまいます。ありがとうございます。

(小川 記)

